

大園遺跡における古墳時代集落の変遷

丹 羽 佑 一

I はじめに

本稿は、大阪府高石市の大園遺跡で検出された古墳時代中、後期の集落をとり上げ、その掘立柱建物群の構成を分析することによって、各期の集落の特性、及び古墳時代における集落の変遷を明らかにするものである。

私は、先に奈良大学紀要10号（昭和56年12月）に『大園遺跡における古墳時代中期後半の建物群の構成』を発表したが、稿了後に大阪府教育委員会から『大園遺跡調査概要』のVとVIが刊行され、5世紀後半、6世紀後半の集落の新資料が報告されたのであった。新資料は左記の論文の分析対象と一連の集落群を形成する掘立柱建物群や、半世紀後の古墳時代後期後半の掘立柱建物群の姿を伝えるものであった。新資料の出現と従来の資料の集積は、先の論考の検証とテーマの発展を可能にするものであった。本稿は、必要と期待をもって資料群を分析した、その結果を報告するものである。

II 検証視点の抽出

先の論考は、昭和50年10月6日から、51年3月24日に至る都市計画道路松原―泉大津線高石綾園地区の発掘調査で検出された古墳時代中期後半（5世紀後半）の掘立柱建物群を分析対象にして、その建物群が和泉北部の豪族の館であると結論した。結論は、建物群の構成を諸側面から分析して得られた諸特性の集積であり、各側面には特定の分析方法が必要であった。よって、その結論の有効性は、分析方法の有効性に基づくといえる。また、分析方法の有効性は、各期の建物群の特性を抽出できるかどうかにかかっている。以上より、検証の対象、及びその方法を明らかとなったが、まず先の論考の建物群の分析の対象である諸側面、対応する分析方法、結論としての特性を要約し、検証対象を明確にすることにしよう（図一、表一）。

(i) 対象―遺構群の分布 方法―活動諸カテゴリーによる空間の分割、及び配列より、集落の形態、方向を抽出。同一活動による空間の

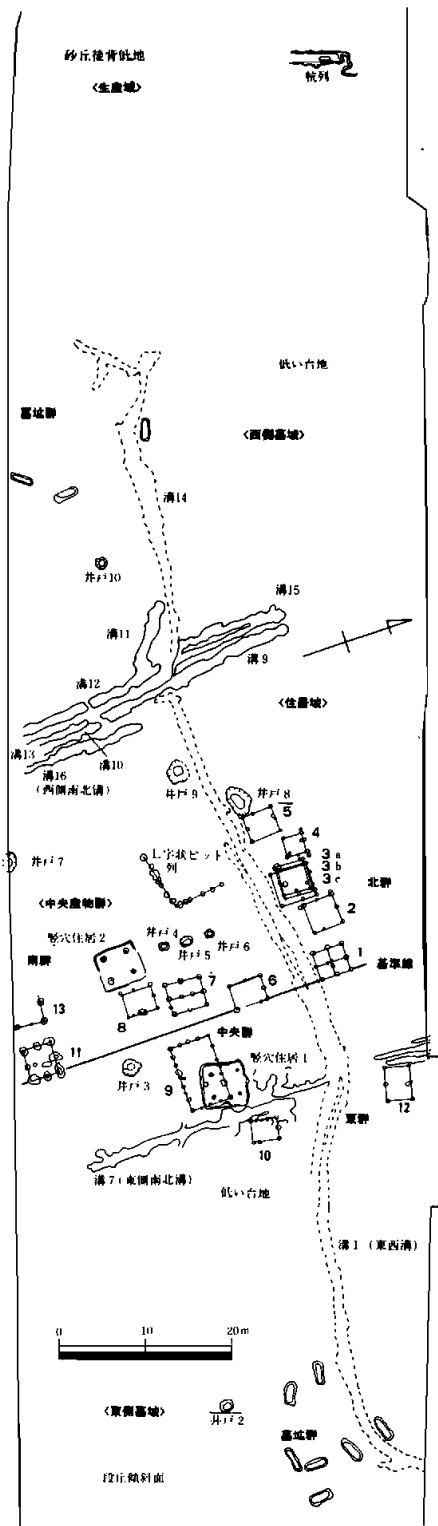


図1 VI区建物群の分布 (註1文献に加筆)

分割から住人の構成を抽出。結論—東から西へ墓域、住居域、墓域、生産域と活動が配列される集落形態。集落は東西方向をとる。東西両墓域には土墳墓が構築されているが、それより住人の間には同格の二分される集団が存在することが分かった。

(ii) 対象—掘立柱建物の編年 方法—切合関係、軒の出による重複関係にある建物間の方向差より、構築時期の指標として建物の方向を測定する。建物の方向と建物の分布の相関関係に、建物の方向の一方向連続的変遷を想定する。結論—中央住居域の建物群には三度の構築時期が知られるが、三期目が北群のみの構成であるのに対し、一、二期は中央、南北両群による計三群の構成である。なお、一期目の中央群は竪穴住居二基と倉一棟から形成されている。

(iii) 対象—掘立柱建物の分布 方法—建物群の方向より、配置規制の抽出、結論—各群を統一する配置規制の存在、規準線の存在。九号大型住居を中心として、その前面に中央群、左右に南北群を配するコの字状配置、九号中心とした倉のシンメトリックな配置より、九号による倉群の掌握。以上、九号の卓越性、所属する中央群の他群への優位性、一方九号が象徴する統一性を明らかにした。⁽³⁾

(iv) 対象—長方形度 方法—各建物の梁行と桁行の長さの比を長方形度と呼び、各建物について値をとる。建物群と数値の関係に注目する。結論—北群は一より大・二以下、中央群は一・二より大・二以下、九号は一・六と隔絶した数値をとる。倉は一以上一・二以下、竪穴住居は一である。上記した建物配置より、九号の卓越性、中央群

の他群に対する優位性を知ったが、これを、長方形度の側面から表わすと一・二より大の数値が優位性の指標となる。

(v) 対象—井戸の形式と分布 方法—井戸の形式分類と分布より井戸機能の分化を分析。井戸の分布と建物群の分布から建物群の構成を分析 結論—井戸は大型で方形、楕円形プランのもと、小型で方形プランをとるものの二形式に分かれるが、前者は中央、南北三群に伴い、後者は3基中央群に伴う。これより、三群は消費の単位であり、群内は一つの長方形度に納まるから、建物は等しく住居であるとす。後者には前者と反対に非日常生活用水の供給を求め、井戸を媒介とし

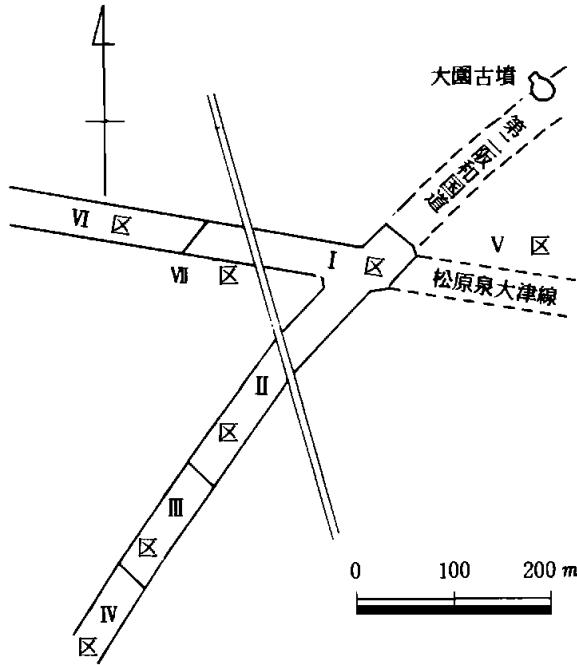


図2 大園遺跡調査地区関係図
(註1文献に加筆)

た祭祀を想定した。その個数を考慮し、中央、南北三群を形成した人々は、上位、下位の関係を持ちつつ、九号棟のもとに一つの祭祀集団としてあったことを推定した。

(vi) 対象—墓制 方法—掘立柱建物群の構成と、墓形式と墓域から想定される墓制間の比較同定作業 結論—南北二群を形成した人々の墓には東西墓域の土墳墓が、したがって、残る中央群、就中九号住人の墓は遺跡周辺の墓形式中、取石古墳群から求めることができる。

以上、分析の対象、方法、結論を要約したが、次に、新資料、蓄積資料の分析を行なう。なお、以下の分析では、その主要なものとして建物の方向、長方形度、先には付随的対象とした面積を対象として挙げ、他の対象、方法は必要に応じてとり上げることとする。

III 各地区の掘立柱建物群の分析⁽⁴⁾

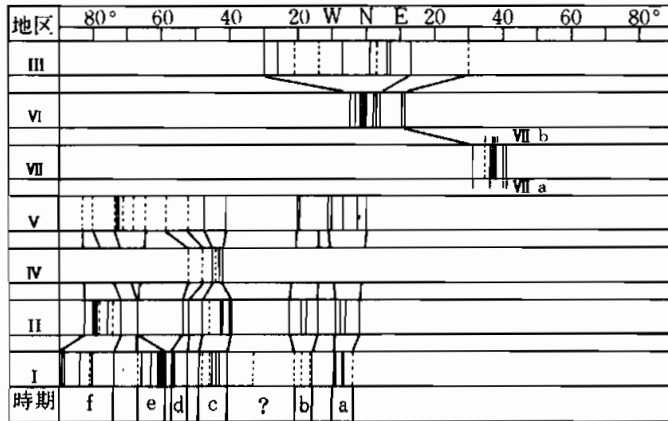
(i) 建物の方向⁽⁵⁾

各地区の建物の方向を観察し、建物群の時期区分と各時期の建物群の構成を抽出することとする。

(a) 五世紀後半建物群の方向(図一、四、六、表二)

(1) III区の建物の方向は、二二五を除いて全てN—十三度—Eから⁽⁶⁾⁽⁷⁾

N—三〇度—Wの範囲に収まる。二二五だけはN—六〇度—Wの方向をとり、大きく外れる。上述の角度域には散漫であるが、A—Dの四



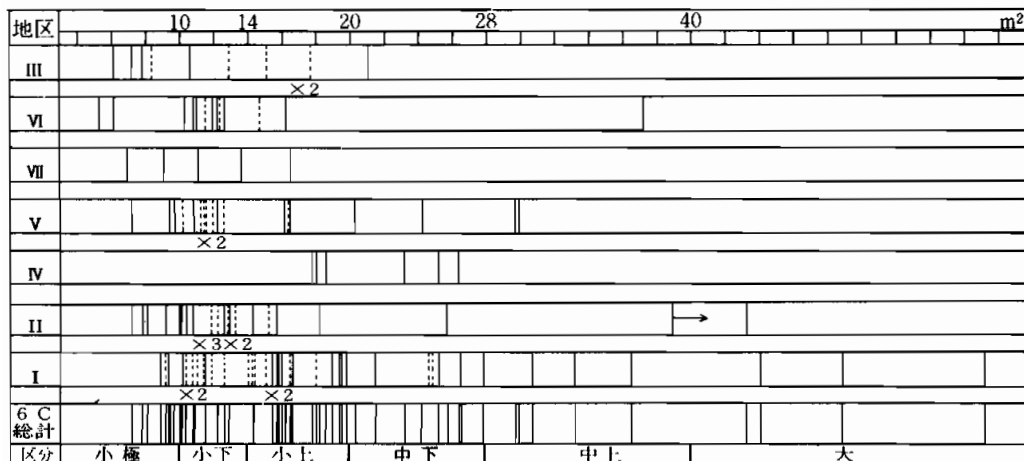
(i) 各区建物の方向分布

時期	b	a	f	e	d	c
I A	○	○				
I B			○			
I C	○					
I D	○			○	○	
I E	○	○	○	○	○	○
II A	○	○	○	○	○	○
II B			○			
II C	○	○	○			
IV					○	○
V	○	○	○	○	○	○

(ii) 6世紀後半各区建物群の変遷



(ii) 各区建物の長方形分布 (点線は倉を示す。6 C 総計では倉を除く。×2等は該当棟数を示す。)



(iii) 各区建物の面積分布 (点線は倉を示す。6 C 統計では倉を除く。)

図3 各区建物の特性指標

群	番号	方向	長方形度	面積	備考	群	番号	方向	長方形度	面積	備考
I-A	307	N-74°-W	1.38	15.98	f期	II-C	372	N-11°-E	1.05	12.95	f合
	310	N-9°-W	1.03	11.90	a合		373	N-3°-E	1.08	13.30	b合
	311	N-6.5°-W	1.43	25.20	a期		374	N-19°-W	1.03	11.9	a合
	312	N-83°-E	1.29	15.75	"		375	N-1°-W	1.00	12.25	b期
	313	N-88.5°-W	1.43	27.72	f期	III-1	217	N-13°-E	1.17	15.12	A期
	314	N-83.7°-W	1.26	15.40	"		218	N-87°-W	2.06	21.12	B期
B	308	N-9°-E	3.05	44.08	"		222	N-6°-E	1.15	7.8	"
	309	N-10°-E	3.09	57.19	"	2	209	N-7°-E	1.89	6.12	"
	315	N-16.2°-E	1.24	14.28	"		210	N-1°-E	1.00	17.64	"
C	301	N-83°-E	1.13	10.85	a合		211	N-7°-E	2.00	7.22	"
	302	N-86.5°-E	1.06	24.48	"		216	N-13°-E	1.07	8.4	A期
	303	N-57°-E	1.10	9.28	x合	3	212	N-76°-E	?	?	C期
D	304	N-57°-W	1.13	16.34	d合		213	N-7°-W	1.17	15.12	"
	305	N-9°-W	?	?	a期		214	N-7°-W	1.12	12.92	"
	306	N-66°-W	1.03	12.60	e合		215	N-60°-W	?	?	"
	316	N-26°-E	1.74	30.66	e期	4	219	N-30°-W	?	?	D期
	317	N-61°-W	1.72	36.34	d期		220	N-26°-W	?	?	"
	318	N-60°-W	1.50	26.46	d期		221	N-69°-E	1.36	10.64	"
E	319	N-49°-W	1.13	10.20	c期	IV	376	N-48°-E	1.30	17.76	d期
	320	N-56.5°-W	"	"	d合		378	N-46°-E	約2.00	約35.2	"
	321	N-56.3°-W	1.20	10.80	"		381	N-42°-W	?	?	"
	322	N-59°-W	1.13	11.52	"		382	N-45°-W	1.29	18.62	"
	323	N-42°-E	1	14.44	c合		383	N-43°-W	1.36	26.4	"
	324	N-42°-E	1.46	19.98	"		377	N-42°-E	?	?	C期
	325	N-37.5°-E	1.88	48.96	d期		379	N-38°-E	1.39	8	"
	326	N-40.8°-W	1.32	19.00	c期		380	N-42°-E	1.45	23.2	"
	327	N-59.2°-W	1.50	19.44	d期	V-北	5	N-11.5°-W	1.38	11.6	b合
	328	N-33.5°-W	1.10	27.50	x合		6	N-0°-W	1.09	12.58	a合
	329	N-80.5°-W	1.23	11.10	f期		7	N-15°-E	1.03	16.10	e合
	330	N-0.5°-E	1.22	15.84	"		8	N-14°-W	1.16	11.84	a合
	331	N-69°-E	"	24.75	b合		9	N-19.5°-W	1.68	24.32	a期
	332	N-45.2°-W	1.88	33.18	c期		10	N-49°-E	?	?	c合
	333	N-44.2°-W	1.52	9.50	"		11	N-73°-W	1.53	17.68	e期
	334	N-16°-W	?	?	b期		12	N-21.5°-E	1.75	17.92	"
	335	N-52.5°-W	?	?	d合		13	N-73.5°-W	1.09	11.52	"
	336	N-45.2°-W	?	?	c期		14	N-38°-E	1.33	9.72	d期
	337	N-9.3°-W	1.14	8.96	a期		15	N-22°-E	?	?	e期
	338	N-43°-W	1.41	21.45	c期	南	1	N-80°-W	1.41	11.89	f期
	339	N-48.5°-W	1.08	14.04	c合		2	N-31.5°-E	1.25	7.20	d期
	340	N-44.2°-W	1.05	15.20	"		3	N-47.5°-W	1.33	20.28	c期
	341	N-19°-W	1.03	9.30	b期		4	N-55°-W	1.00	11.56	d合
	342	N-73.7°-E	1.13	11.52	"		16	N-2.5°-W	1.17	9.86	a期
	343	N-1.5°-E	1.63	16.64	f期		17	N-79°-E	1.13	10.20	b合
	344	N-60.5°-W	?	?	e期		18	N-10°-W	1.52	16.50	a期
	345	N-63°-W	1.13	18.00	e合		19	N-20°-W	1.00	11.56	a合
	346	N-64°-W	1.00	10.24	"		20	N-6.5°-W	1.25	16.20	"
	347	N-86°-E	1.65	15.81	a期		21	N-19°-E	1.38	9.36	e期
	348	N-19°-W	?	?	b期		22	N-25.5°-E	1.29	10.08	"
	349	N-73°-E	?	?	"		23	N-16.5°-E	1.03	11.22	n合
II-A	350	N-67°-W	1.50	18.2	e期		24	N-7°-E	1.06	12.24	f期
	351	N-22.5°-W	1.10	11.88	b合	VI-中	6	N-2°-W	1.39	10.92	2期
	352	N-48°-W	1.10	15.17	c合		7	N-2°-E	1.20	14.70	1合
	353	N-39.5°-W	3.20	9.18	c期		8	N-1.2°-W	1.24	10.44	2期
	354	N-44°-E	1.95	7.8	"		9	"	1.60	36.96	"
	355	N-7.5°-W	1.20	10.44	a期		1	"	1.13	11.52	n合
	356	N-82.5°-W	2.1	7.22	f期		11	N-0.5°-W	1	12.25	"
	357	N-40°-W	1.30	10.08	c期	北	2	N-3.5°-W	1.06	12.60	3期
	358	N-80°-W	1.20	10.8	f期		3a	N-10°-W	1.13	16.34	2期
	359	N-42°-W	?	?	c期		3b.c	N-3°-E	1.03	11.90	1期
	360	N-42.5°-W	?	?	"		4	N-0.2°-W	1.09	5.28	2期
	361	N-53.5°-W	1.00	12.35	d合		5	N-4.8°-W	1.20	10.80	3期
	362	N-47.5°-E	1.20	14.35	c期	南	10	N-10.5°-E	1.00	6.25	x期
	363	N-52°-W	2.25	12.96	d期		12	N-11°-E	1.30	12.00	"
	364	N-40°-W	1.03	11.90	c合	VII-a	205	N-37°-E	?	?	"
B	365	N-79°-W	2.50	43.26	f期		206	N-37.5°-E	1.23	11.10	"
	366	N-75.5°-W	1.90	10.12	"		207	N-38°-E	1.35	9.10	"
	367	N-79.5°-W	?	?	"		208	N-34.5°-E	1.41	16.32	"
C	368	N-14°-W	?	39.12	b期	b	201	N-41°-E	?	?	合
	369	N-9°-W	1.40	12.60	a期		202	N-31°-E	1.18	13.60	"
	370	N-16°-E	1.70	25.74	f期		203	N-40°-E	?	?	合
	371	N-18°-E	1.04	8.12	"		204	N-36°-E	1.75	7.00	"

表1 大園遺跡古墳時代掘立柱建物一覧表(面積単位は㎡である)

箇所の集中部分がある。Aには二一六、二一七が、Bには二〇九、二二二が属する。A、D各部に属する建物群は、各々一時期に構築された建物群である。以上、二一五の構築時期を加えて、Ⅲ群には計五

期にわたる構築時期を想定できるのである。各期の新旧関係を見ると二二二と二二一の切合関係において、二二二が二二一より新しいと報告されている。よって、Cに属する建物の構築がBのそれよりも新しいといえよう。又、各部に属する建物の分布をみると、AとB、Cと

Dの建物は各々類似の分布を展開している。さらにAとBの建物は、C、Dのそれと比較すると一群として扱ってよい程度に近接している。以上を総合すると、Ⅲ群の構築時期は大きく、AとB、CとDの二期に分かれ、前者が先行するといえるのである。これは又、建物の方向が次第に西に振れていくことを示している。よって、AからDへの変遷を想定できるのである。以上、Ⅲ群建物群の変遷で重要な点は、前後する二時期の間で、建物群の構成が大きく変わるといふ点である。

(2) VI区には前記論考の分析対象が存在する⁽⁸⁾。その内容については上述したが、他地区との比較上問題になる部分について検討する。まず建物の方位の分布範囲がⅢ群に比して非常に狭いこと、さらにその間に四箇所の角度集中部分があり、その密集度も非常に高いことが注目される。方位の密集度が高いということは、建物の方向設定の精度が高く、一方では配置規制が厳格であったことを示す。建物群構築における計画性、技術の高さを物語るものである。まさにVI群の内容は、豪族の館に相応しい特性である。Ⅲ群の特性とも関連して、両者の比較を行なうと、Ⅲ群A、Dは、方位の分布から連続的であり、一方VI群は、西に偏った三集中部分が連続的であり、それに対応する。この対応部分の関係をみると、Ⅲ群がVI群を包摂した状態にある。Ⅲ群の拡がりにはVI群の倍以上である。すなわち、両区の建物群は共存するが、Ⅲ区の建物群の構築にあつては、建物の方向設定が非常にルーズであったといえよう。これは両建物群の性格を考える上で非常に重

要な相違点である。

(3) VII区⁽⁹⁾の建物群は、その分布から東西二群に分かれる。東のものをVIIa群、西のものをVIIb群とする。VIIa群の建物の方位はN—三十四—五度—EからN—三十八度—Eの範囲に収まる。VI群に匹敵する集中密度である。ところが、VIIb群の方位分布は、ほぼVIIa群に重なるものの、その集中密度は低い。以上よりVIIa、b群は共存するが、建物の方位集中密度に差があるところより、性格を異にした建物群の併存が認められる。なお、VII群とⅢ、VI群との関係であるが、方向を全く別にするところから、共存関係は認められない。VII群は、Ⅲ、VI群の前、或いは後に編年されるが、竪穴住居を伴わない点から、後に位置づけることができよう⁽¹⁰⁾。

(b) 六世紀後半の建物群の方向(図二—六、表二)
六世紀後半に属する建物は、I、II、IV、V区で検出されている。

I、II区は隣接し、検出された建物群は、その構成上一連のものと考えられるので、まとめて検討することにする。

(1) I、II区の建物群の方向⁽¹¹⁾

I区の建物群の方向を観察すると、方位図における方位の分布形から明らかな様に、建物群の方向は、N—四度—WからN—九—三度—W、N—十六度—WからN—二十一度—W、N—四十一度—WからN—四十九度—W、N—五十二—五度—WからN—五十六—五度—W、N—五十九度—WからN—六十七度—W、N—七十四度—WからN—

八十九・五度―Wの六つの部分に分けることができる。よって、I区の建物群の構築が六期にわたったことが知られるのである。方位が最も北に近い時期をa期とし、最も西に近いものをf期、その間に位置する各期を北に近いものから順にb期、c期…と呼ぶことにする。

II区の建物では、方位の分布はほぼI区と同様の展開をみせる。注目すべきことには、N―二〇度―WからN―四〇度―Wの間に建物群の分布が見られない。これはI区も同様である。

(2) IV区の建物群の方向⁽¹²⁾

IV区の建物群の方向は、I区のc期の角度域に全て収まっている。

IV区ではc期一時期の建物群構築しかなかったといえる。

(3) V区の建物群の方向⁽¹³⁾

V区では、大園古墳の南から西を巡る様に建物群が在する。建物の方向をみると、方位図における分布形態は、I、II区と大分異なるが基本的には六区分がみられ、角度域の数値もほぼ一致する。又、N―二〇度―WからN―四〇度―WにはI、II区と同様に建物群が欠落している。

以上、各区における六世紀後半の建物群の方向を検討したが、I、II、V区に六期、IV区に一期の建物群の構築時期が抽出された⁽¹⁴⁾。しかし、a―f六期の新旧関係は不明である。各地区各期の建物群の構成はどの様なものであり、又如何に変遷したのか。我々は建物群の編年を知らなければならない。よって次に、上記六期の編年を試みることにする。

にする。

なお、該期の建物群が検出された各区の内、I、II区では全期にわたる構築がみられ、検出された建物数の多さとあいまって、それらが当地域の中心であったことが推定される。又、当地域には建物群構築に対する規制の存在も想定される。よって、分析は、I、II区を中心据え、各区を総合して進めることにする。

(ii) 六世紀後半の建物群の編年(図三二六)

まず方位図で建物の方向の分布をみると、上述した様にN―二〇度―WからN―四〇度―Wの間は広い空白部になっている。これは各区同様の現象である。一方、この空白部の両側にはb期とc期の建物群が分布しており、その分布は、各々のサイドの他期のものより相対的に密である。したがって、その空白部は、建物群の分布が漸移的に希薄になり、やがて全く分布がみられなくなってしまいう一方、散漫な分布の再開、本格的分布が後続するという形成過程によってもたらされたものではないといえよう。まさにその間は、海峡が陸地を断つ様に或いは陸地がそこから始まる様に不連続となっているのである。この様な空白部の様相は、その両側に設定された構築時期の一つが、全建物群構築の開始期であり、今一つが最終期であったことを推定させるものである。b、cどちらかが開始期なのである。ところが、五世紀後半の建物の方向の変遷において、一方向に連続的に変化することが観察されている。よって、I、II区の構築時期の変遷は、b↓a↓f

↓e ↓d ↓c か、或いはc ↓d ↓e ↓f ↓a ↓b となる。しかし、I、II区ではそれを決定する資料を欠く。この状況に対し、V区の建物群の編年において、小笠原好彦氏が間接的性格をもつものの、若干の資料を報告している⁽¹⁵⁾。SB二、四の柱穴から六世紀末の須恵器が、SB九から六世紀中頃の須恵器が出土し、SB十三は六世紀末に掘削された溝に先行する、ということである。この資料をV区の建物の方位図に对照させると、d期がe期に後続することになり、又b期が六世紀中頃に位置する。

以上より、I・II区 a ↓ f 六期は、次の様な新旧関係を持つことになる。b ↓ a ↓ f ↓ e ↓ d ↓ c である。これは又、地域の建物群構築の編年でもある。それでは次に、この編年を基にして、各区各期の建物群の構成を分析することしよう。

(iii) 六世紀後半の建物群の構成 (図三一六)

(1) 建物の空間分布より、I区でI A ↓ I Eの五群、II区でII A ↓ II Cの3群のまとまりが観察される。各群を編年すると図三の(ロ)が得られる。この図と各期の建物群の空間分布を照合すると、e期を境にして建物群の構築が大きく変化したことが分かる。すなわち、b ↓ f 各期の建物群の構築は、ほぼI・II区全域を覆うのに、e期の範囲縮小を経て、d期に至ると様相は一変する。その分布範囲はI・II区の中央部に限定され、I E群、II A群に建物の構築をみるだけになってしまっている。もっとも逆の見方をすると、構築空間が限定されること

によって、それまで小規模な建物群の構築しかみられなかったI E群とII A群に、建物群構築の増大が観察されるのである。以上より、I・II区の建物群の形成は、b・a・f期とe・d・c期の前後する二時期に大きく分かれるのである。この場合、a ↓ fの六構築時期は、この二大時期区分における小区分を意味し、建物構築の六小期という位置づけができるのである。

なお、この小期と大区分の關係に言及すると、建物群の建設に基本構想があり、それが数次にわたる建物の構築によって完成するという過程が想定されるのである。これは前半期の極めて強い傾向であるがその根拠の一つとして、構築の経緯と分布空間に一定の關係が認められることが挙げられる⁽¹⁶⁾。これに対し、I E群の後半期の建物では、倉群の位置が定められている様であり、そこに計画性も想定されるが、それはむしろ建物群の形態の問題であろう。倉から一般建物への建直し、又その逆(三三八―三四〇)、小型建物と大型建物の切替關係(三二五―三二六)⁽¹⁷⁾が示すところは、後半期の建設における将来的構想の欠除である。

この様に建物群の建設における小期と大区分の關係を検討すると、I・II区の建物群の構築は、ここでも前半期と後半期とで大きく異なっていることが分かる。よって、建物群の構成を分析する時、前半期と後半期の二時期にまず区分する必要があるが、前半期においては、各小期毎に建物群の構成を検討するのではなく、前半期として一括した

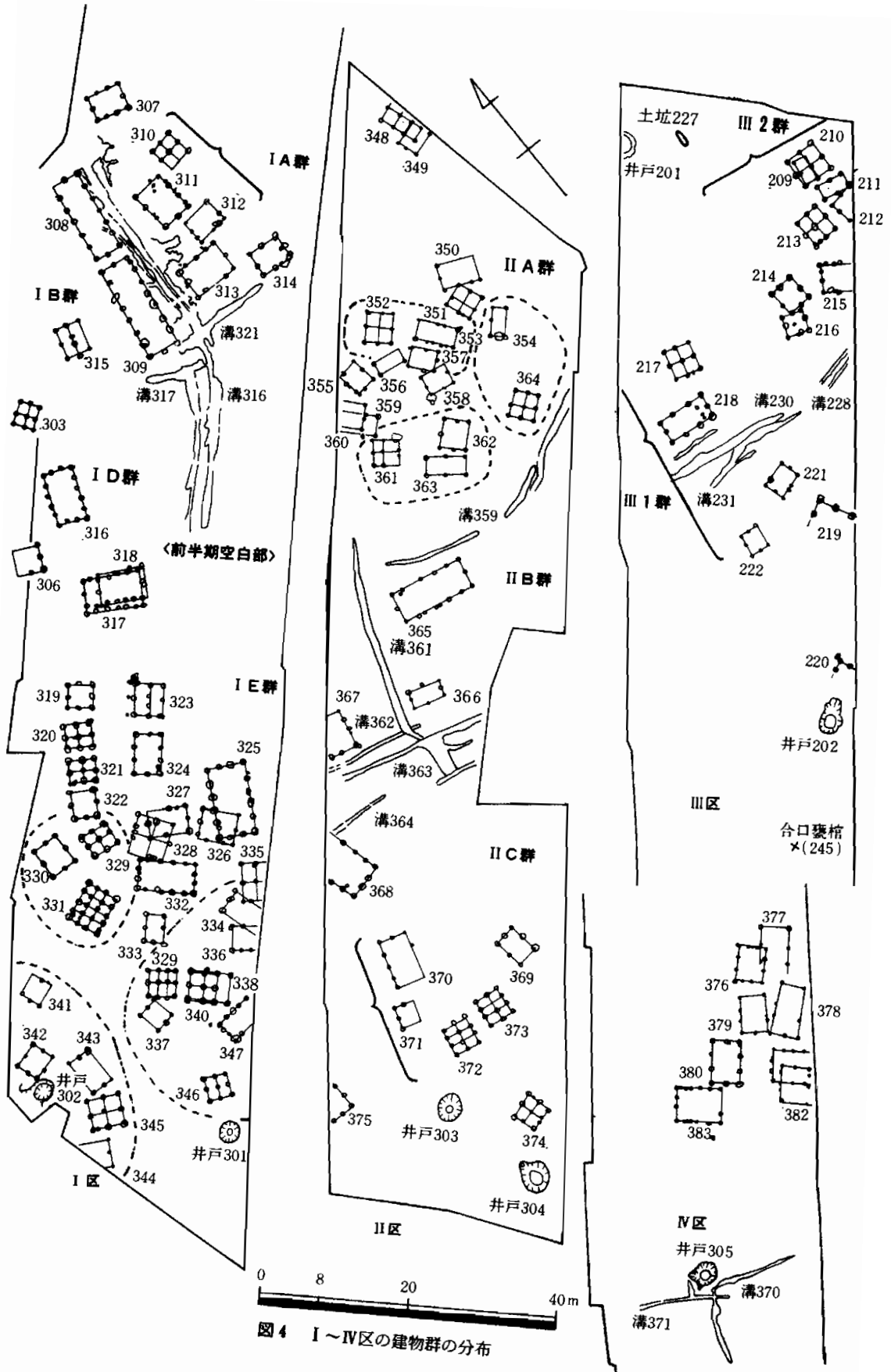


図4 I~IV区の建物群の分布

建物群を分析対象としなければならない。一方後半期は、小期毎にその構成を捉える必要がある。⁽¹⁸⁾

以上の分析から建物群の構成を検討すると、前半期は、I・D群を除くIAⅠⅡC計七群が、南北に連なっている。ところが、IAⅠⅡC群とIE群の間に広大な空白部（直線距離にして六〇m、ほぼIE群の存在する空間にあたる）が存在している。各群間の間隔を考慮すると、この空白部はIAⅠⅡC群を他群から分離するに十分である。すなわち、建物群はIAⅠⅡC群と、IEⅠⅡC群の南北二群に大きく分かれるのである。ところが、各群の構築時期にみる群形成の経緯をみると、IA群とⅡC群、IB群とⅡB群が南北に対関係を持つ。以上より、前半期の建物群は大きく南北に二分されるが、一つのまとまりある群であったといえるのである。⁽¹⁹⁾

又、各群の内部に目を移すと、IA群は群形成の経緯より、倉を持つ中央群と持たない周辺群の二群構成である。IB群は長大な建物二棟と倉一棟よりなり、それを細分する根拠は、今見当らない。IE群は、倉を含む三〜五棟の小さな群が四つあり、ⅡA群では類似の群が一つある。ⅡB群は、大きな建物と小さな建物の組み合わせが、中央を南北に走る溝の東に形成されている点を重視するならば、今一つの組み合わせが、溝の西に想定される。ⅡC群は、群形成の経緯より大きい建物と小さい建物と倉一〜二棟のまとまりが二組みられる。一方が他方を囲む様にして在る。以上、いわば群内の群について検討した

が、抽出した群を小群とすると、IAⅠⅡC各群は中群、IAⅠⅡC群、IEⅠⅡC群各々のまとまりは大量となる。I・Ⅱ区総体のまとまりは五世紀後半と比較すると、その規模において四つ程の集落を合併したものに当たる。

さて、e期に入ると、上述した大空白部にID群が構築され、以降の変化の前哨となる。IE群でも建物の構築は見られるが、こちらは前代のあり方を踏襲する。すなわち、この様な状況は、e期を過渡期と呼ぶに相応しいものである。

後半期のd期になると、IDⅠⅡA群に建物群の構築がみられる。IE群では前半期のあり方は一掃され、倉群の分離、大型建物と小型建物の組み合わせがみられる。ⅡA群は前半期のあり方を踏襲する。

最終末C期に至ると、IE群とⅡA群にしか建物の構築はみられなくなる。e期以降の旧態変貌が、さらに進み、前半期のものだけでなく、後半期初頭のものまでも壊して、新たな建物の構築が行なわれた（三二五―三二六を指す）。結果出現した建物群は、以前と全く異なった形をとる。矩形に建物群が配置されるのである。なお、建物群の耐用年数を配慮すると、この期に至って、前半期の殆どどの建物が廃絶されたものと推察される。つまり、建物群の編年から抽出された、I・Ⅱ区建物群の一大変化は、この期に至って俄かにその姿を明確にしたといえる。その変化の内容は、前半期建物群構成の崩壊、ID群の形成、IE群の変遷、ⅡA群の保守性、これらの諸現象の有機的連

関の中に見い出すことができよう。

(2) IV区では、d-c期に建物の構築がみられる。d期の建物群はI区IA群に近似する。c期の構築では、この配置は崩壊し(切合、軒の出による重複関係)、三棟の直線的配置がみられる。以上IV区の建物群の構築をみたが、重要な点はd期に出現するという点である。I・II区の変革時期に対応するのである。

(3) V区では、I区と同様にb期の建物群の構築が認められる。各期の分布の特徴から、構築時期はb-a期、f-e期、d-c期の三期に分けられる。早い方から一二期とすると、一期では建物は南北に列をなすが、よくみると、二三期の小群が、南北方向に千鳥足状に点在しているのが分かる。よって南北方向の列が東西に並列するこ

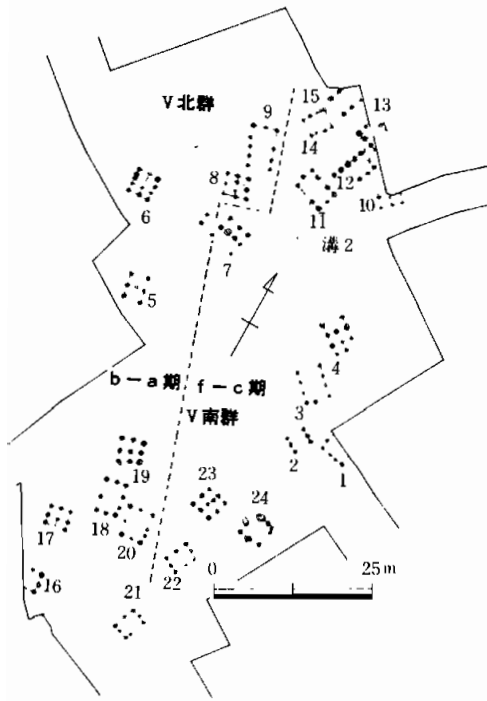


図5 V区建物群の分布(註4分献に加筆)

とになる。西列の小群は南北二群あるが、明らかなどころでは倉よりなる(五、六)。これをa類とする。一方東列の小群も又南北二群あり、こちらは一棟の倉と一二期の建物からなる。これをb類とする。すなわち、群の構成にみる差異は、分布空間の差異に対応するのである。さらに重要な点は、一期の建物は、以降の構築との関連を考慮するとa、b二類よりなる南北二つのまとまりが対峙する形態になるということである。

二期に入ると、建物群の構築は、一期の東側に移るが、一期より明確に南北二群対峙の形をとる。もっとも、一期の南北二群は、南北同一の列上に位置するが、二期の二群は、東西方向の関係ももつ。これは各々の群が、一期の群を基礎にして、その東側に又方向を振れさせて構築した必然的結果である。ところが、南北各群の建物の配置をみると、南群では南北方向に列をなして並び、北群ではコの字状に巡る。一期の同型の群の南北対峙と比較して、大きな差異が観察されるのである。

三期に至ると、二期の北群の周辺と、南群の北に連続する様に構築される。この三期と二期の建物の位置関係は、一期と二期のそれと異なって、前代の建物群を補充する様相を呈している。すなわち、建物の存続年数から想定される共存関係を考慮すると、二、三期の建物群は、共存した可能性が大なのである。(20)

以上、六世紀後半の建物群の構成を分析し、その変遷を跡づけた。

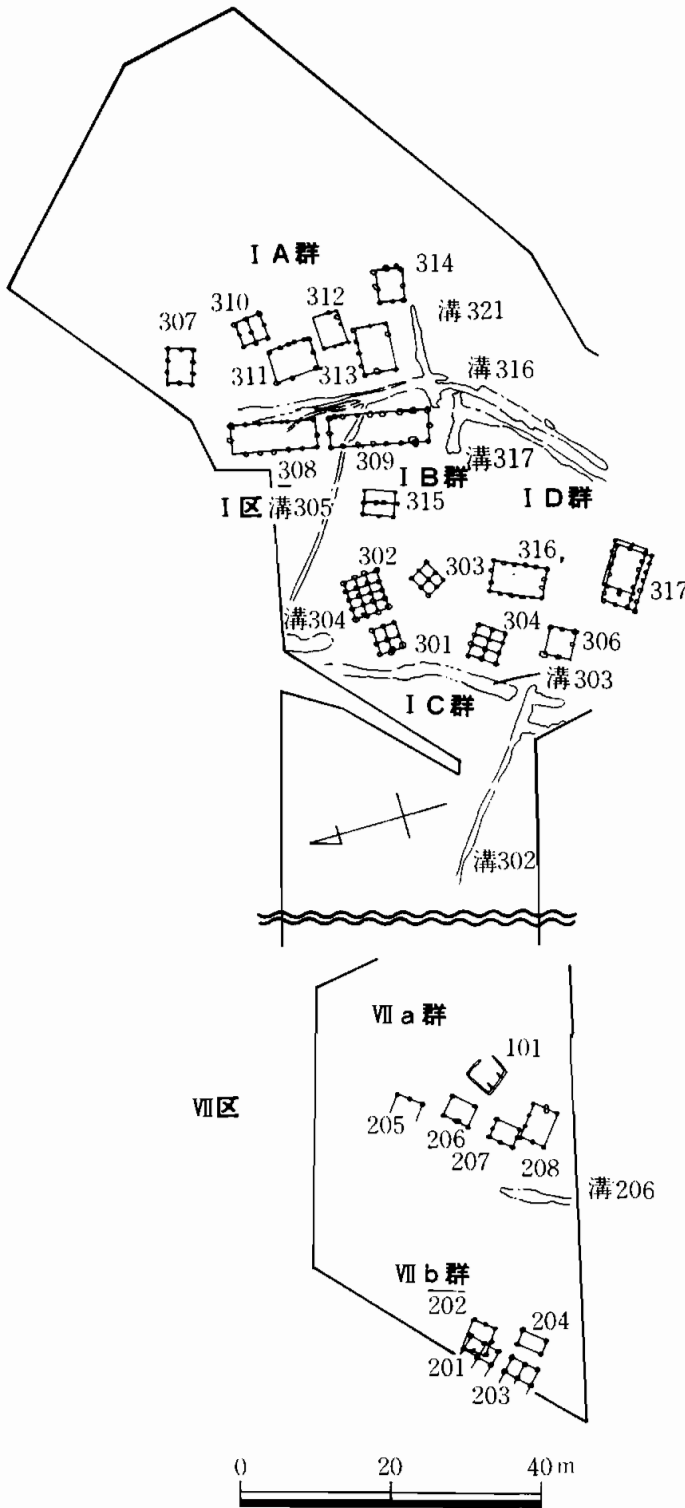


図6 I、VII区建物群の分布(註1文献に加筆)

しかし、その変遷が意味するところは、現段階では不明である。それを明らかにする為には、各期の建物群の特性を分析し、その変遷を追求しなければならぬ。よって次に、建物の面積、長方形度を特性の尺度として、建物群の特性を分析することにしてしよう。

(iv) 五世紀後半の建物群の特性(図三、表一)。
 五世紀後半の建物群の長方形度分布を調べると、一以上・二以下、

一・二より大一・四以下、一・四より大の三分がみられる。大きい方から順にイ、ロ、ハとする。又、建物の面積分布を調べると、一〇㎡以下、一〇㎡より大十四㎡以下、十四㎡より大二〇㎡以下、二〇㎡より大の四区分がみられる。後述する六世紀後半では、二〇㎡以下の範囲が充実し、二〇㎡より大二八㎡以下、二八㎡より大四〇㎡以下、四〇㎡より大の三分がさらに追加される。両世紀の建物群特性の比

較上、共通した面積区分を用い、各区分に統一した名称を与える。すなわち、小さい方から小極、小下、小上、中下、中上、大とする。各地区毎に建物の長方形度と面積の構成、及び倉の有無を検討すると、表二ができれば。

各群の長方形度と面積の「関係」に注目すると、例えば長方形度イの建物は、Ⅶ区Ⅶb群、Ⅲ区Ⅲ?群では面積が小極となり、Ⅲ区Ⅲ1群、Ⅵ区中央群では中下、中上となる。すなわち、「関係」は群によって異なる、と同じになる。このことは、群がその「関係」を左右するのであり(群によって異なる側面)、さらにその「関係」は、群の特性(性格)と結びつきを持つこと(群は本来個であるが、群によって同じ「関係」を持つ)を示している。したがって、建物と長方形度の関係は、型式として捉えられ、それは群の特性を示すものといえるのである。

よって、ここに五世紀後半各群の長方形度と面積間の「関係」を抽出すると、Ⅶa型、Ⅶb型、Ⅲ1型、Ⅵ中央型、Ⅵ北型が得られる。又、集落についてみると、Ⅲ区はⅢ1型+Ⅶb型⁽²¹⁾、Ⅵ区はⅥ中央型+Ⅵ北型と表わすことができる(表二)。

次に、六世紀後半についても同様の方法でその特性を分析することにして。

(v) 六世紀後半の建物群の特性(図三、表二)。

六世紀後半建物の長方形度分布を検討すると、一以上一・二以下、

一・二より大一・五以下、一・五より大一・八以下、一・八より大二以下、二より大二・五以下、三以上の六区分が知られる。五世紀後半と比較すると、一以上一・二以下にくるものは倉以外殆んどなくなり五世紀後半で一・二より大一・四以下の区分が、一・二より大一・五以下と拡がり、一・四より大と一括されていた区分の始まりが、一・五と大きくなり、分布の増加と共に、さらに四区分されるに至る。新たに設定された四区分に、大きい方からイ1、イ4の名称をつける。

一方面積は上述した通りである。

五世紀後半と六世紀後半の建物を単純に比較すると、総じて長方形度が伸び、面積も拡大されたといえよう。⁽²²⁾

次に、各建物群の長方形度と面積の関係を検討すると、表二ができあがる。型式は比較上、五世紀後半の建物群の観察によって抽出されたものを使用した。型式の認定上生じた変形の部分、度合は、五世紀後半から六世紀後半への変遷を知る上で重要な項目である。

以上の分析結果から、次に本稿の結論として、五世紀後半から六世紀後半への、又六世紀後半における建物群、集落の変遷を、六世紀後半建物群の特性から跡づけることにしよう。

IV おわりに―建物群特性の変遷

各建物群の特性型式を挙げ、その変遷を追うことにしよう。

時期	群	型式	長方形度	面積区分	倉	備考 所属建物	
5世紀後半	Ⅶa	Ⅶa型	□	小上・小下・小極	無	205～208	
	Ⅶb	Ⅶb型	イ	小	極	有	204. 倉201. 203
			ハ	小	下		202
	Ⅲ1	Ⅲ1型	イ	中	下	有	A-B期、Ⅲ区型村はⅢ1型とⅦb型の合成である。218. 倉217
	Ⅲ2	Ⅶb型	イ	小	極	有	A-B期 209. 211. 倉210. 216
			ハ	小	下		
Ⅵ中央	Ⅵ中央型	イ	中	上	有	Ⅵ区型村はⅥ中央型とⅥ北型の合成である。 9. 倉1. 7. 11	
		ロ	小	下		このまとまりが独立したものは、Ⅶaの変形でⅦa'型とする。6. 8	
6世紀後半 b a f	ⅠA	Ⅶa型	□	小上・小下・小極	無	2. 3 a～3 c, 4. 5	
			ロ	中下・小上	有	3. 1. 1. 312. 倉310	
	ⅠB	ⅠB型	イ4	大	大	有	Ⅵ群9号棟に類似。ⅠC群(倉群)が伴う。308. 309. 倉315
			ロ	小	上	有	Ⅵ区型村より 334. 337 (イ一中上)の建物を除いた型式をⅥ'型とする。
	ⅠE	Ⅵ'型	イ1	小	上	有	(330. 倉 329. 331)小群(347. 倉346)小群(341～344. 倉345)小群、e期構築分を含む
			ハ	小	極		
	ⅡA	Ⅶb型	イ3	小	極	有	後半期には、イ4-小極とロー小極の組合せ-(353. 357. 倉352)小群、イ3-小下とハ-小上の組合せ-(362. 363. 倉361)小群がある。(355. 356. 358. 倉351)小群
			ハ	小	下		
	ⅡB	ⅡB型	イ3	大		無?	Ⅲ1型に類似。 365 367
			イ2	小	極		366 ?
	ⅡC	Ⅵ中央型	?	大		有	ⅡC群は、Ⅵ中央型小群とⅢ1型小群の合成である。(368. 369. 倉373. 374)
			ロ	小	下		小群
			Ⅲ1型	イ1	中	下	有
	Ⅴ北	Ⅶa型	イ1	中	下	有	b-a期 Ⅴ南群と共にⅥ中央型となる。(9. 倉8) 倉群(5. 6)
			ロ	小	上	有	b-a期 (18. 20. 倉19) 倉群17
	Ⅴ北	Ⅵ中央型	イ1	中	下	有	f-e期 Ⅴ南群と共にⅣ区型村となる。12. 倉7
			ロ	中	下		11. 13?, 15?
	Ⅴ南	Ⅵ'型	ロ	小下・小極	有		f-e期、後半期(d-c期)には主として南群にⅦa型変形群が付加される(ロー中下、ロー小極に倉が付属2-4)。1. 21-24. 倉23
ハ			小	下		317と318の建直し関係によってイ1-中上、2棟の組合せも想定される。(316. 317. 倉304. 306)。316. 318. 倉304. 306	
6世紀後半 e d c	ⅠD	Ⅵ中央型	イ1	中	上	有	これはC期の構成である(324. 326. 332. 333. 338. 倉323. 339. 340. 倉群319～322)。d期はイ2-大、ロー小上の組合せである。
			ロ	中	下		これはC期の構成である(377. 379. 380)。d期にはⅥ中央型が存在した(376. 378. 381. 383)。
	Ⅵ	Ⅶa型	□	中下・小極	無?		

表2 各区建物群の型式

- (i) 型式の変遷
- (a) Ⅶa型⁽²³⁾(前半期ⅠA群、後半期Ⅳ、Ⅴ南群)
- ⅠA群をみると、面積が拡大されているが、建物間の面積比は五世紀後半と同じである。しかし、群形成の経緯からみて、この型式をとる群は二組あり、内一組は倉一棟を持つ。この型式は本来倉を持たないところより、この群間(二小群間)に格差が生じていることがわかる。⁽²⁵⁾後半期に至ると、Ⅰ・Ⅱ区ではこの型式がみられなくなるが、Ⅳ区C期に出現する。この群では面積比が中下-小極と変化しており、建物間の格差が拡大されたことが分かる。倉の有無は調査区域の関係上不明である。同様の現象がⅤ区の最終末に出現する群にもみられる。この群は倉を持つ。以上Ⅶa型の変遷をみたが、建物間の格差が拡大される様になる。しかし、それも六世紀末の現象であり本型式が他型式に比して保守的であったことが分かる。
- (b) Ⅶb型(前半期、後半期ⅡA群)
- 本型式をとるのはⅡA群だけである。前半期では、長方形度イの建物の長方形度が伸張されるが、面積比は五世紀後半と同じであり、構成上殆んど変化がなかったといえる。後半期も、長方形度、面積の拡大、伸張はみられるが、構成上大きな変化はない。本型式は、Ⅶa型式と共に、非常に保守的である。
- (c) Ⅵ型(前半期ⅠE群、Ⅴ南群)
- 本型式は、Ⅵ型から中心建物(Ⅵ群九号棟)を除いた型式である。

すなわち、倉とVII a'型とVI北型の混合形式である。VII a'型はロー小下×2、VI北型はハ―小上、小下、小極である。IE群は、ロー小上の一小群、イ―小上、ハ―小下と小下・小極の二小群から形成されている。すなわち、長方形度I、ロ、ハが存在すること、同様の面積構成を展開すること、この条件にできるだけかなうものを検討した結果、

IE群にVI型式を同定したのである。しかし、IE群のVI型と五世紀後半のそれとの間には大きな変異が認められる。その変異を検討すると、ロー小下がイ―小上に、一方ハ―小上、小下、小極がハ―小下、小極と変化したことが分かる。これらの変化を総合すると、六世紀後半、前半期の建物群は、五世紀後半の長方形度ロの建物VII a'型とハの建物VI北型の格差が拡大された形態をもつといえるのである。V区ではf―e期、すなわち若干遅れて南群にみられるが、長方形度ロの建物(VII a'型)で面積の構成が変化している。小下と小極に分解するのである。本型式は、前二者に比して非常に変化が激しいのである。

(d) VI中央型(前半期V群、後半期ID、IE、IV、V北群)

本型式は、VI区九号棟とVII a'型と倉の混合形式である。VII a'型はロー小下×2、九号棟はイ―中上である。

前半期b―a期V群は、北群と南群に分かれるが、北群に九号棟類似建物と倉、南群にVII a'型建物と倉が構築されている。⁽²⁶⁾北群の建物(ハ)はイ―中下で、VI区九号棟より一ランク小さい。一方南群はロー小上×2で、面積が一ランク上がっている。すなわち、五世紀後半に比

して、両型式の建物間の格差が縮小されているといえよう。この傾向は後半期に向かって増大される。V区f―e期では、V北群にVI中央型が形成される。イ―中下と、ロー中下の構成である。長方形度の構成よりVI中央型と同定されるが、面積比が異なっている。すなわち面積区分が消えて、本来あるはずの格差が無くなっているのである。これは、長方形度イ―の建物の面積が縮小され、一方ロの建物の面積が拡大されたことによる。六世紀後半の面積の全般的拡大傾向に対し前者の変化は極だっており、又共存する南群建物(VII a'型)間の格差拡大に対し、両者の関係は対称的であり注目される。

I・II区において後半期(e―d期)に、ID群が出現する。三一七―三一八の建直しによって、イ―中上二棟と倉の組み合わせと、イ―中上一棟、ロー中下一棟と倉の組み合わせの前後する二型態が知られる。後者は、長方形度の組み合わせから、VI中央型に同定されるが、そうすると、ロー小下がロー中下と大幅に変化したことになる。すなわち、長方形度イの建物とロの建物間の格差が極端に縮小したことが分かる。又、前者と後者の前後関係を検討すると、それは不明であるものの、この型の混乱が看取されるのである。⁽²⁷⁾なおIV群d期にも同様の現象がみられる。

IE群にはd、c期に引き続いて建物の構築がみられるが、d期では建物群の面積比、長方形度の構成から、これも又、VI中央型に同定される。イ―中上がイ2―大に、ロー小下がロー小上に変化したこ

とになる。最終末期c期になると、イ2―中上、ロー中下、小上、小極の組み合わせが知られる。VI中央型の長方形度口の建物群が分解した型である。長方形度イの建物とロの建物の格差が一方では縮小され、他方では拡大されている。同様の現象は、上述した後半期のV群でもみられる(縮小―北群、拡大―南群)。

(e) I B型(前半期I B群)

五世紀後半になかった型であり、六世紀後半においても前半期のI B群に限られる。イ4―大の長大な二棟と倉一棟の構成である。又、その位置関係から、I C群すなわち倉群が付属するといえる。この様な構成に最も近いのが、五世紀後半VI区九号棟と倉群の組み合わせであり、I B群の場合、九号棟のさらなる長大化と、その二棟接続したものに、倉が付属した型といえる。このVI区九号棟との関連性は、I B群にI A群(VII a型)が伴うことから証明されるが、次項で述べることとする。

(f) II B型(前半期II B群)

五世紀後半には無かった型式であり、六世紀後半でもII B群に限られる。イ3―大の長大な一棟とイ2―小極一棟の組み合わせである。上述した様に、この群の南にセットとなるもう一群の存在が知られるから、倉の有無を保留すると、III 1型に近い型といえる。III 1型はい―中下一棟、ハ―小極一棟に倉を付属したものであるが、II B型は、イ―中下をイ3―大に、ハ―小極をイ2―小極に変えたものといえる。

I B型と共に、六世紀後半の全般的長方形度の伸長、面積の拡大を考慮しても、長大な建物の出現は、注目に価する。なお、III 1型との関連性は、II A群(VII b型)が伴うところからも証明されるが、その詳細は次項に譲る。

(g) II C型(前半期II C群)

五世紀後半に無かった型式であり、六世紀後半でもII C群に限られる。II C群は構築の経緯から、三六八―三六九、三七〇―三七二の二群に分けられる。三六八―三六九は、イ?―大一棟、ロー中下、倉二棟の構成であり、VI中央群に同定される。三七〇―三七二は、イ1―中下一棟、ハ―小極一棟、倉一棟の構成であり、III 1型に同定される。すなわち、II C群はVI中央型とIII 1型の混合型になる。VI中央型もIII 1型も五世紀後半集落の中心群であったが、型式における数値も殆んど変わるところがない点を見ると、六世紀後半にあっては、相対的地位の下降が推察される。上述したI B、II B群の出現がこれを補完するところは明らかであろう。

以上建物群特性の変遷を検討したが、五世紀後半から六世紀後半への移行において、上位(長方形度イ)⁽²⁸⁾、或いは下位建物(長方形度ロ、ハ)内部における格差の拡大、結果として中間層各種の形成(I E群、II C群)が一般的となる。但し、V群では上位、下位の建物間の格差が縮小される。これは、中間層の台頭と共に、五世紀後半の最上部の構成(長方形度イ―ロ、面積中上―小下)を、低いクラス(I E、V

北群)が受け入れたことによる。五世紀後半VI区九号棟の卓越性はIE群、V群建物には備わってはいなかったといえるのである。しかし、このような変動を受けつつも、五世紀後半の諸型式の構成を襲い、長方形度、面積に新たな区分が付加されたことは、五世紀後半以降の変動が、六世紀後半前半に再編成されたことを意味している。

後半期も終末に至ると、様相は一変する。群中卓越した建物(II C群)、又卓越した群(IE、II B群)は消滅し、面積に長方形度を相乗した型式の変化は、上位と下位の建物間の格差の縮小、下位建物の分解、格差の拡大という相矛盾した方向を表わしている。このような変化は、前半期の型式の変異で捉え難いものであり、再編成された体制の崩壊を示すものである。しかし、上述した変遷は、独り建物群の型式にみられるだけでなく、先の空間構成の変遷と軌を一にするものである。よって、次に集落のこの二要素の対応関係を分析することによって、集落の特質、変遷を検討することにしよう。

(ii) 大園遺跡における古墳時代集落の変遷

(a) 五世紀後半の集落

III区とVI区に二つの集落が存在する。それが分解した形の一部分として、VII区VII a群、VII b群が在る。III区は、調査範囲内ではIII 1型+VII b型、VI区は九号棟+VII a'型+VI北型+倉群と特定の集落形態を持つ。VII a群はVII a型、VII b群はVII b型である。III区、VI区の建物群は建物の数、構築期間の長さから、地域の中心的集落となるが、その空

間構成(建物方向の方位分布集中度、建物の配置、倉群の配置)、中心建物(III区二一八、VI区九)の比較から、VI区集落の優位は明白である。さらに注目されるところは、III区集落にVII b型群が、VI区集落にVII a'型と型を若干変えてVII a型群が各々属し、又、分散した形でもVII a型とVII b型の群が一つにまとまることは無い。この二型式の群の帰属は、村の特性に基づくところといえよう。

(b) 六世紀後半の集落

I・II区とV区に集落が存在する。その分解した形の一部分として、IV区VII a群が在る。五世紀後半と六世紀後半の集落の位置を比較すると、大園古墳を中心にして、その南西側に六世紀後半の集落、その西縁を巡る様に五世紀後半の集落が在る。いわば、古墳を中心とした同心円的空間利用の変遷が展開されているといえよう。⁽²⁹⁾

I・II区集落は、前半期と後半期にその空間構成は変わる。まず前半期をみると、IA・IB・IC群の大群と、IE・IIA・IIB・IIC群の大群が広大な空白部を介在させて、南北に並んでいる。IA群はVII a型、IB群はI B型、IC群は倉庫群、IE群はVI型、II A群はVII b型、II B群はII B型、II C群はIII 1型とVI中央型の混合型、の各型式を持つ。今、VII a型とVII b型の群をみると、各々別の大群に属している。すなわち、これは五世紀後半集落の地域構成と同じである。又、これらの群の所属より、上述した様に、IB群はVI区九号棟と倉群の組み合わせの系譜をひき、IA群・IC群・IB群と組になって

の大群は、VI中央型の變形となる。一方、II B群は同様に、III I型の系譜をひき、II A群とのまとまりは、III区集落の型となる。さらに残りのII C群はIII I型とIV中央型の混合型であり、五世紀後半における拠点集落の中心群の合体したものである。又、I E群はVI型で、群の形は変えているものの、VI中央型と結合してVI区集落となり得る。すなわち、所属する上位群の構成を考えると、II C群のVI中央型群と結合してVI区集落となる。

以上より、I・II区前半期の集落は、五世紀後半のIII区、VI区集落を構成する群が分解、増加し、六世紀後半前半期に至って、I・II区で再編成されたものといえよう。その編成原理は、五世紀後半の地域構成に基づいており、又群の特性を追うと、VI区集落型の優位性（I A～I C群の大群としての相対的独立性）、その中心建物（I B群）の卓越性も変わっていない。さらに重要な点は、群の分解、増加に伴った上部クラスの群（I B、II B～II C）の階層分化と、それに相反する、VII a型、VII b型群の固定された群間（VI区型村、III区型村との結びつき）、群内の関係である。

なお、V区の前半期（b—a期）の集落は、南、北二群に分かれるが、一つのまとまりとしてVI中央型になる。しかし五世紀後半のVI区集落と比較すると、その配置、建物の方向分布集中密度、中心建物（北群九）の卓越性において較ぶるべくもなく、VI中央型群の階層分化における下位クラスの位置が与えられよう。よって、I・II区集落との

関係においても、それに基づく格差が認められるのである。

さて、後半期に入ると、前半期の建物との共存関係を想定しても、最終末期C期に入ると、ほぼ前半期の建物は姿を消す。そして、まさにその時期に、建物群は全く新しい配置形態をみせるのである。すなわち、I E群空間に矩形に建物群と倉が巡り、その外に倉群が存在するのである。群は、本来広大な空白部であったI E群の隣りにI D群が、他はI E、II A群だけにみられる。一方、群の型を検討すると、I E群d期ではイ2—大+イ2—小上、e期ではイ2—中下+ロー—中上、小下、小極で、一応VI中央型の變形に同定されるが、前半期のI E群の型イ1—小上+ハ—小上、小極、VI型からの変遷は、その間の数値がひらきすぎて不連続となる。建物群型式における前半期との不連続性、空間構成の大きな変化、建物配置にみられる新しい形態、これらは、後半期における、I・II区とV区の建物型式の推移の相同性、後半期末のIV区建物群の出現とも関連して、六世紀後半前半期の体制の崩壊、新しい型式の創設を示しているといえよう。

註

(1) 広瀬和雄・他『大園遺跡発掘調査概要・V』一九八一年 大阪府教育

委員会

広瀬和雄・他『大園遺跡発掘調査概要・VI』一九八一年 大阪府教育

委員会

(2) 広瀬和雄『大園遺跡発掘調査概要Ⅲ』一九七六年 大阪府教育委員会

(3) 集落初期の分布をみると、中央部に竪穴住居二基と倉一棟、北部と南部に各々掘立柱建物一棟がある。この分布はそれ以降、北群、南群、中央群の三群構成に継承され、そこに同一集団、もしくは系譜でつながる集団の存在が推定された。従って、当初より群構成が定まっていたところから、竪穴住居の内一基が、後の九号棟の性格を持っていたことが推察される。

これは竪穴住居が同期の掘立柱より上位に位置することになり、通念に矛盾する。しかしこの構成は、佐味田宝塚古墳の家屋文鏡の中の竪穴住居の蓋に通じる。この対比から逆に、家屋文鏡中、蓋を持つ高床建物と竪穴住居は支配層（鏡を出した佐味田宝塚古墳の地域性を考慮すると畿内王権構成員が想定される）の住居であり、それは大きく、上下二クラスに分けられる支配層の存在を示しているといえよう。これより、大園遺跡中期後半の竪穴住居（おそらく一号）の家長Ⅱ後の九号家長が、この下位のクラスに属していた可能性が指摘されるのである。

(4) 大園遺跡は調査期間も長く、調査区域も多方面に渡り、さらに調査主体が複数であることから、調査区域の名称記述が煩雑になる。よって、本稿では各地区に次の様な通し番号を与えることにした。

I区ⅠIV区 これは昭和五十五年第二版和国道建設に伴う第三次発掘分
で、『大園遺跡発掘調査概要・VI』に報告された地区である。地区名は報告書を踏襲した。なお、同年調査分で、『大園遺跡発掘調査概要・V』に報告された中央区はI区に入れた。

V区は、大園遺跡調査会が昭和五十年に調査した地区で、昭和五十一年に『大園遺跡発掘調査概要2』で報告されている。

VI区は、大阪府教育委員会が昭和五十年に調査した地区で、昭和五十一年に『大園遺跡発掘調査概要Ⅲ』で報告されている。先の論考の対象地区である。

VII区は、先の『大園遺跡発掘調査概要V』に報告された西地区である。
I、II、IV、V区から六世紀後半の建物群が検出され、III、VI、VII区から五世紀後半の建物群が検出されている。

(5) 建物の方向は、一般的に棟の方向Ⅱ桁行の方向によって表わされるが、上述した建物群の分析でも明らかな様に、一時期の建物群がL字形に、或いはコの字形に配置される場合がある。この場合一時期に建物の方向が二極あり、それは互いに直交することになる。これを一棟の建物で検討すると、直交する梁行、桁行のどちらかが一時期の建物の方向を示すことになる。よって、北から南、或いは西から東という絶対的な方向が不明の場合においては、建物の方向を四半分の方角角度で表示することにした。但し建物間で方位図における位置を明確にしたい場合は、必要に応じて、表示角度域を拡大した。なお梁行を建物の方向にした場合は、表示線を破線にした。なお基本的には報告書の角度を用いたが、実測図との間に大きな開きがある場合は実測図からおこした角度を採用。

(6) III群とする。建物の方向は報告書の角度を用いた。

(7) 本稿では、建物番号は報告書を踏襲したが、SBの記号は省略した。

(8) VI群とする。建物の方向は報告書実測図よりおこした。

(9) VII群とする。建物の方向は報告書実測図よりおこした。

(10) VI群では、集落形成初期に竪穴住居と掘立柱建物が共存した。

(11) I区の建物群をI群、II区の建物をII群とする。I、II区の建物の方向は、報告書の実測図よりおこした。報告されているII区の角度が、実測図と約三十度のひらきがあった為である。

(12) IV区の建物群をIV群とする。建物の方向は、報告書の角度を用いた。

(13) V区の建物群をV群とする。建物の方向は、報告書の角度を用いた。

(14) 各時期における建物の方向は、各区を越えて共通している。他地域との比較が前提条件となるが、この様な状況は、一地域を覆う建物構築に対する規制が存在したことを推定させる。しかし、この規制が強圧的でも、各区共通して高い技術水準を必要とするものでもなかったこと、つまり構築主体が各区の建物群のまとまりに想定される集団であったことが、各区の同一時期の方位角度域に変異が観察されたことで理解されるのである。

(15) 小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第二十五巻第四号 一九七九年

(16) IA群—II C群へ建物群の両端V、IB群—II B群へ両端に隣接V、IE群—II A群へ中央部Vの関係を指す。その他の根拠として、II A群の三五〇と三五一以外に前半期の建物間に切合関係がないこと、前半期の建物はその分布が広い為か、一時期の建物の方向の分布集中密度が低いが、主要な建物では相等的の間隔があっても方向を同じくする傾向があること(I

B群三〇八、三〇九—II B群三六五、三六七)が挙げられる。

(17) 建物の方向の分布密度は、後半期の方が高い。密度の粗密は、一つには建物群の位置関係によっている。それは粗に見える前半期でも、隣接する建物群の方向が集中することから分かるのである。すなわち、後半期の建物群の方向分布密度の高さは、規制の強弱や、基本構想の有無に依るものではなく、中央部に集中して建物群が構築された、その構築形態に由来するといえよう。

(18) 前半期の建物が、後半期に存続する場合の空間構成の分析について触れておこう。掘立柱の耐用年数を想定するならば、構築時期を異にする建物間の共存関係は、当然起こり得る現象であるが、これを決定するには、建物構築の各小期への時間の配分、地域における人口の人為的変動など、不確定要素を多く考慮に入れなければならない。よって、構築時期を異にする建物の内、切り合っている、あるいは軒の出を想定すると重なり合って建たない、という明確な関係を持つ建物間以外は、はっきり共存関係の有無を決定できるものはない。しかし、空間構成を分析する場合、構築時期を異にする建物の共存関係は、その建物間の位置関係に共通した空間構成が存在するかどうかにかかっている。したがって、I・II区の空間構成を問題する時、前半期と後半期に二分して分析することは妥当と考える。この原則は他地区の分析でも同様である。

(19) これは検出されている建物群が、その全容をほぼ現わしていることを前提とした結論である。この前提について検討すると、南端部のII C群の南

には建物は続かず、北端部のⅠA、ⅠB群の北は、昭和五十二年の調査
（『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要』一九七八年 大阪府教育委員
会）では直接連続する建物は検出されていない。又、ⅡC群の構築は空間

利用において求心的であり、ⅠAⅠC群では東西方向に広がる。以上よ
り、建物群の南北の限界はほぼ検出されているものと推察される。東西の
限界は不明確であるが、ⅠAⅠC群、ⅡC群では上述の空間利用の傾向
から、検出された部分は、群の中心域であり、建物群の構成を観察する条
件は整っているといえよう。問題はⅠE、ⅡA、ⅡB群における境界であ
るが、後述する様に群内の構成はほぼ把握できるので、群の全容を推察で
きる。以上、現在検出されている建物群をもって、一つのまとまりある群
として分析可能であると考えられる。

(20) この二三期の建物間の関係に対し、一二期の建物間に相互補完的関
係は見い出せない。二期の各群には、一期の変貌した姿が認められるので
ある。建物群は東に移動されたといえよう。

(21) 調査範囲の状況から、或いは、これに他型式が付加される可能性もある。
(22) 五世紀後半と六世紀後半の長方形度、面積区分を比較すると、六世紀後
半は、五世紀後半を基準にしていることがわかる。前論考では、建物の
格付けにおいて、長方形度一・二より大を上位に、それ以下を下位に位置
づけ、その住人にも対応する階層差を認めた。しかし、六世紀後半におけ
る長方形度の全般的伸張に対して、この格付けが適用できるのかどうか、
これは、変遷内容を規定する重要な事柄である。

(23) VII a型の変形としてVII a'型がある。VII a型は面積構成が小上+小下である
のに対し、VII a'型は小下だけの構成である。これは、VI中央型から九号棟
と倉を除いた型である。

(24) 各建物群の面積構成は、面積区分からみて、連続的（例小上+小下）で
あるか、飛石的（例中下+小下）であるか、或いは又その混合であるか、
いずれかである。各建物群の面積比とは、この型をいうのである。

(25) 六世紀後半になると、殆どどの群（中群、小群）が倉を持つ。よって、
ⅠB群の一棟の倉は、ⅠB群のまとまりを示すものかもしれない。

(26) 南、北群の結合体が、VI中央型となる。これが集落の一形態となるかど
うかは、調査範囲から不明である。

(27) 三二六に対する、三二七と三二八の建直しのあり方に、それが示されて
いる。三二八はロー中下、三二七はロー中上 廂付きである。

(28) 長方形度Ⅰの建物間の拡大は、ⅠB群、ⅡB群の出現に求められ
るが、それは、ⅠB、ⅡB群とⅠE、ⅡC群の建物間に観察されるのであ
る。

(29) この変遷は墓域の移動、群集墳の出現に対応するが、地域の空間構成が
全く変動してしまつたことを意味しており、社会の一大変革が想定される。